

## 平成22年度 日立市教育研究会先進校等調査派遣研修報告書

日立市立駒王中学校 教諭 河野 訓子

- 1 派遣期日 10月14日(木)～10月15日(金)
- 2 研修先 学校名 静岡大学教育学部附属浜松中学校  
所在地 静岡県浜松市中区布橋3-2-2  
学校名 静岡大学教育学部附属浜松小学校  
所在地 静岡県浜松市中区布橋3-2-1

### 3 研修内容

静岡大学教育学部附属浜松中学校 公開授業研究会

研究主題 「学びひたる」授業の創造 ～他者とのかかわりあいを通して～

#### (1) 公開授業参観

- 第3学年・社会 指導者 池谷 文孝 教諭
- 学習のくくり 公民的分野「憲法とわが国の政治」  
「より良い社会の担い手になるために、マスメディアとの正しい付き合い方を探ろう」
- 中学校3年間で社会科のめざす姿  
すべての人々が幸せに生きられる社会の実現をめざし、社会事象を多面的・多角的にとらえ、公正に判断し、社会的な課題を自分にひきつけて考え、よりよい社会を築く担い手になろうとする意思をもつ生徒
- 研究主題にせまるために
  - ①学習の流れの「つかむ学習」の段階で、他者のマスメディアに対する批判的な視点を知り、それを活用していくことで、「政治とは〇〇ということなのだ」「自分たちのできる社会貢献は〇〇だ」といった認識が芽生えやすくなる。
  - ②他のグループの発表を聞き、そこで得た情報を自分のグループにもち帰り、その情報と自分たちで再構成した新聞の内容とを比較・考察させる活動に「学びひたる」場面を設定する。この場面は、生徒にとって発表前よりも他者の考えを吸収できる状態であり、それを活用してさらに自分たちのメディア・リテラシーを構築する場である。切実感をもって取り組むことができる活動であるためにここに「学びひたる」場面を設定した。
- 「学びひたる」ための条件と手だて
  - ・条件1 「学ぶ対象が自分にとって切実なものであること」  
手だて1 自分たちだけにしかできないという意識をもたせる。
  - ・条件2 「挑戦レベルと技能レベルのバランスがとれていること」  
手だて1 力を補ったり、力の発揮を阻害する要素を取り除いたりした学習活動を仕組む。
  - ・条件3 「学習活動がはっきりしており、自己の学習が目標に近づいているというフィードバックがあること」  
手だて1 学習活動において何をどのようにするのかを分かりやすく示す。  
手だて2 情報を顕在化させる。
- 本時の学習の目標
  - ・グループで作上げた新聞の発表を通して、どのような視点からマスメディアの情報を判別して再構築したのかを自分たちの見方や考え方をふまえて説明することができる。
  - ・他のグループの発表を聞いて、自分たちのメディアに対する見方や考え方との違いなどをとらえ、さらにメディア・リテラシーが今後の学習や生活の中で生かすことのできるものであるということに気付くことができる。
- 期待する「学びひたる」姿
  - ・発表を聞いてもち寄った仲間の考えをグループ内でメモを取りながら聞き、自分の考えと仲間の考えを照らし合わせながら自分の考えを深めようとしている。
  - ・グループ内での意見交換を通して、他のグループの発表内容について自分のメモを見ながら評価しようとしている。

### ○授業の様子

最初に、発表からまとめまでの活動の流れが示されたことで、本時のグループや個人の目標をもつことが可能となり、生徒一人一人が生き生きと話し合いに参加しながらのスタートとなった。グループのリーダーは発表の内容の要点を手際よく確認できていたことから、普段の授業でもこのようなスタイルでの学習を積み重ねていることが伺えた。また、グループでの目標を設定することにより、自分たちの課題を解決していく見通しをもつことができていた。

新聞の発表会では、コミュニケーション能力を高める場として発表者は身ぶり手ぶりを交えて活気のある発表が行われていた。自分のグループの作品に責任をもって発表できるということは、聞き手である他のグループからの質問にきちんと答えられることである。質問の時間には、発表を行ったグループの様々な生徒が質問に答えていたことから、その成果が伺えた。

他のグループの発表を聞いたことで、他のグループのメディア・リテラシーについて知ることができ、マスメディアについて理解の高まりがあり、自分のメモを見ながらグループ内で積極的な話し合いが行われていた。互いのつながりを認識させる場を設けた成果である。また、他のグループの新聞をメディア・リテラシーの観点から評価することも根拠を入れながらワークシートにまとめることができていた。

### (2) 静岡大学教育学部付属浜松小学校との連携

#### ○義務教育 9 年間の中の 3 年間であるということをふまえた実践

- ・教科や総合的な学習の時間等、可能な範囲で附属小学校と附属中学校の研究内容を知り、接点を模索し、連携を図った教育実践をめざす。
- ・小、中学校の新学習指導要領及び、附属小学校のカリキュラムを理解し、少しでも中学校のカリキュラムに反映させていく。

#### ○静岡大学教育学部付属浜松小学校の研究

- ・「自己」を豊かにする～学びの質を高める授業～という研究テーマのもとに 5 年次の発表が行われた。学び合いの質を高めるには、児童の学習意欲の向上が欠かせない。

- ① かかわり合い→学習活動や仲間とかかわっていききたいという子ども一人一人がもつ欲求
- ② 充実感・達成感→自己肯定感や自信につながり、環境に効果的にかかわりたいという欲求
- ③ 主体性→自分から仲間を求める、学習活動に進んで取り組んでいく欲求

以上の①～③の欲求を満たす環境を授業においてつくっていくために教師の意図や願いを明確にした単元構想と授業構想を作り上げていく必要がある。それでは子どもの 3 つの欲求を満たす環境というのはどのようなものであるか。

- ① かかわり合い→思いやりをもって受容される環境
- ② 充実感・達成感→目標や目的が明確で見通しをもつことができ、仲間と意味のあるかかわりがもてる環境
- ③ 主体性→強制されることがなく自分の意思が尊重される環境

このような環境を教師は授業実践を積み重ねながらつくり上げていくことが大切である。さらに、教師の意図や願いを子どもと共有して望ましい学び合いの姿となっているかを確認するには「学習の振り返り」が大切である。教師にとっては具体的な方策の有効性や次の方策を検討する材料となり、子どもにとっては学び合いの指標となる。その積み重ねが学び合いの質を高めていくと考えられている。

### 4 感想

今回の研修で他者とかわることの喜びや価値の実感を育んでいる授業を静岡大学教育学部付属の小中学校で参観することができ、義務教育の 9 年間の教育活動の中で学び合いの質を高める実践を教師が子どもの発達段階に応じてつくり上げていかななくてはならないと強く感じた。附属小学校での研究は 5 年目ということで、附属中学校の生徒の「学びひたる」姿は小学校からの積み重ねの成果である。

今後は、単元構想と授業構想をしっかりと立てて「学習の振り返り」を参考にして、臨機応変に計画を修正しながら日々の授業実践をしていこうと思う。